

新訳 ピノッキオの冒険

コッローディ 作 安藤美紀夫 訳

文研出版



必読選定

文研児童読書館

ピノッキオの冒険

定価 660円

訳者 安藤美紀夫
発行者 佐藤武雄
印刷・製本 図書印刷株式会社



発行所

文研出版

東京都文京区向丘2丁目3-10

TEL(03)814-2151

大阪市天王寺区大道4丁目128

TEL(06)779-1531

©

1970 Printed in Japan

N. D. C.

973 ピノッキオの冒険

文研出版 昭和45(1970)

280p 23cm

必読選定

文研児童読書館

著者との契約により検印廃止

ピ
ノ
ツ
キ
オ
の
冒
険

コ
ツ
ロ
ー
デ
イ
作
きく
安
藤
美
紀
夫
訳
や
浜
田
紀
子
絵
え

文
研
出
版



文研児童読書館のねがい

わたしたちは、わたしたちをとりまく、
さまざまなものからいろいろ学んで大き
くなっていきます。学校での学習からも、
テレビやマンガからも、科学や知識を身
につけ、また楽しみを味わいながら育っ
ていきます。

けれども、せっかちに知識ばかりを自
分のものにすることや楽しさを急い
で追うあまり、ともすれば、人生の真実
とは何か、人間として、どのように生き
ていくべきか、ほんとうの美しさとは何
か、というようなたいせつなことを、忘
れがちになるようです。これは、とても
残念なことです。

そうならないためにも、わたしたちは
人生の教師としての文学、ただしい生き
方を身につけさせてくれる読書というも
のをたいへん重要なものと考えています。

このたび、わたしたちは、多くの著者、
訳者、画家のご協力によって、今なお新
鮮な感動を与えてくれる世界の名作文学、
貴重な文化遺産である神話や民話、さら
に伝記、ノン・フィクション、または未
紹介の新しい力作などを選んで、文研児
童読書館として、おとどけすることにな
りました。

みなさんがたの必読基本図書として、
いつまでも愛読していただけるものと信
じています。

編集委員

石森延男

昭和女子大学教授・日本児童文学学会会長

植田敏郎

一橋大学教授・日本児童文学学会理事

白木 茂

日本児童文芸家協会常任理事

関 英雄

日本児童文学者協会理事長

中川正文

京都女子大学教授・日本児童文芸家協会理事

福田清人

立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長

文研出版編集部



もくじ



ばら色の「こざる」ピ

- 1 ピビに、「ばら色のこざる」というあだ名がついたわ
け
- 2 ピビは、どうして、あんなに美しいしっぽをなくした
か
- 3 ピビは、川に落ち、また、拾い上げられます
- 4 ピビは、若いアルフレッドの友だちになります
- 5 ピビは、旅の道連れとして、アルフレッドについてい
くと約束します。でも、その約束は、はじめから守る
気のないものでした
- 6 ピビは、約束を破って、どんちゃんさわぎをしに、か
けていってしまいます
- 7 ピビは、約束を破ったのをくやみはじめます
- 8 おそろしいおいはぎゴーラセッカが、ピビをポケット
に入れて、連れさります
- 9 ピビは、宿屋の「はえ屋」に着きます。でもそこで、
おながかへったために、ピビは、ゴーラセッカのポケ
ットの裏布を食べてしまいます
- 10 やせっぽちの家のねこ、ナンニがピビのかわりに、お
いはぎのポケットにはいります

66 56 52 47 42 33 25 19 14 11

11 ゴーラセッカはめくらになってから、ばら色のこざる
に再会します

12 ピビは、皇帝になります

13 ピビは、とてもすてきなことを教えてくれる、空色の
毛をしたらさぎに出会います

14 ピビは、とんぼ返りをやらされ、そして、やがて、こ
の物語も、おしまいになります

ピノッキオの冒険

- 1 大工のさくらんぼ親方は、どうやって、子どもみたい
に泣いたり笑ったりする、まるたん棒を見つけたか
- 2 さくらんぼ親方は、友だちのジェットじいさんに、
まるたん棒をくれてやります
- 3 ジェットじいさんは、まるたん棒で、あやつり人
形を作り、ピノッキオと名づけます
- 4 ピノッキオと、ものいうこおろぎの話
- 5 ピノッキオが見つけた卵で、オムレッツを作ろうとする
と、オムレッツが窓から飛んでいってしまいます
- 6 ピノッキオは、火ばちの火に足を乗せたまま、ねむり
ます。そして、あくる朝、目がさめてみると、足がす
っかり焼けてしまっています

117 116 113 107 103 100 92 84 76 72

7 ジェットベットじいさんは、家に帰ると、自分で食べる
ことにしていた朝食を、ピノッキオにやります

119

8 ジェットベットじいさんは、ピノッキオの足を作りな
おし、自分の上着を売って、ピノッキオに国語の本を買
ってやります

121

9 ピノッキオは、国語の本を売って、人形しばいを見に
いきます

124

10 あやつり人形たちは、ピノッキオを見つけ、うれしく
なって大さわぎをします

126

11 火食い親方は、くしゃみをして、ピノッキオを許して
やります。そして、こんどは、ピノッキオが、友だち
のアルレッキーノの命を助けます

131

12 人形使いの火食い親方は、ジェットベットじいさんに持
っていくようにと、金貨を五枚ピノッキオにやります

135

13 赤えび屋という宿屋

140

14 ピノッキオは、ものいうこおろぎの忠告を聞かなか
つばかりに、おいはぎに出会います

142

15 おいはぎたちはピノッキオを追いかけて、とうとうつか
まえて、大きなかしの木のえだにつるします

146

16 空色の髪の毛の少女は、あやつり人形をベッドにねか
せ、三人の医者と呼んで、診察させます

148

17 ピノッキオは、さとうは食べますが、薬は飲もうとし
ません。でも、自分を連れにやってきた墓ほり人夫を
見て、あわてて薬を飲みます

151

18 ピノッキオは、また、きつねとねこに出会います。そ
して、ふたりといっしょに、ふしぎの野原へ、金貨を
埋めに行きます

158

19 ピノッキオは、自分の金貨をぬすまれたばつで、四か
月、ろうやにいれられます

166

20 ろうやから出て、ピノッキオは、せんによさまの家へ
帰ろうと、歩き出します。でも、帰り道で、おそろし
いへびに出会います

169

21 ピノッキオは、おひやくしろうさんにつかまり、おひ
やくしろうさんは、ピノッキオを番犬がわりに使いま
す

172

22 ピノッキオは、どろぼうたちを見つけ、おひやくし
うさんのいうとおりにしたので、首輪をはずしてもら
います

175

23 ピノッキオは、空色のかみの少女のお墓を見て、泣き
ます。それから、おとうさんを助けようと海へ飛びこ
みます

179

24 ビノッキオは、「はたらきばちの島」に着き、せんにょ
さまに出会います

185

25 ビノッキオは、せんにょさまに、これから、いい子
になって、勉強します、と約束します。だって、ほん
とうの人間の子ともになりたかったのです

191

26 ビノッキオは、おそろしいさめを見に、学校の友だち
といっしょに、海へ行きます

197

27 ビノッキオと、友だちとの大げんか。その中のひとり
が、けがをしてたおれ、ビノッキオは、おまわりさん
につかまります

200

28 ビノッキオは、もう少しで、さかなみたいに、なべの
中で、フライにされそうになります

205

29 せんにょさまが、ビノッキオに、「あしたからは、もう
人形じゃなくて、人間の子どもにしてあげる」と、約
束します

211

30 ビノッキオは、友だちの「とうしん」といっしょに、
おもちゃの国へ、出かけていってしまいます

222

31 おもちゃの国で、五か月暮らしたあと、ビノッキオの
両耳は、ろばの耳のようになり、やがて、ほんものの
ろばになってしまいます

229

32 ビノッキオに、ろばの耳がはえてきます。それから
からだがつくりろばになり、いなくなきはじめます

237

33 ビノッキオは、ほんものの小ろばになって、売りに出
され、サーカスの団長に買いとられます

243

34 海に投げこまれたビノッキオは、さかなに食べられて、
もとのあやつり人形にもどります

251

35 ビノッキオは、さめのからだの中で、ある人と再会し
ます。だれでしょう

257

36 ビノッキオは、とうとう、あやつり人形ではなくなり、
ほんとうの人間の子どもに生まれ変わります

262

人と作品 …………… 安藤 美紀夫

277

「ビノッキオ」のみりよく…………… 関 英 雄

279

ばら色のこざるピピ

コッローディ
安藤美紀夫 作
訳





安藤美紀夫（あんどうみきお）
一九三〇年京都市に生まれる。
京都大学文学部イタリヤ文学科卒業。おもな著書に「白いりす」
「ポイヤウンベ物語」（ともにサン
ケイ児童図書出版文化賞受賞）お
もな訳書に、「緑のはのお少年団」
「マルコヴァルドさんの四季」など
がある。北海道北見市在住。



浜田紀子（はまだみちこ）
一九五八年から自由美術協会出品
一九六二・六三、朝日新人展出品
その他グループ活動個展五回
児童遊戯施設設計に従事
現在自由美術協会会員





1

「ピピに、『ばら色のこざる』という
あだ名がついたわけ。」

みんながとてもよく知っているバッテラ・ベスカの森に、むかし、さるの一家が
住んでいました。みんなで七ひき。おとうさん、おかあさん、それに、うんと小さ
なちびざるが五ひきでした。

この一家は、森のまん中の巨人のような木のえだに住んで、すぐいばる年よりゴ
リラに、家賃として、一年に十五のすももの実をはらっていました。ゴリラが、こ
の家の家主だったのです。

五ひきのちびざるのうち、四ひきは、チョコレートのようにくすんだ茶色の毛をしていました。ところが、
五番めのいちばんちっちゃいのは、とんだ自然のいたずらで、ちょっと変わった毛色をしていました。鼻の
ほかは、どこもすっかり、五月のばらの花びらのような、赤といってもばら色の、やわらかい毛でおおわれ
ていたのです。そんなわけで、家の中でも、家の外でも、みんなは、ピピをからかって、いつもあだ名で呼
んでいました。さる語で、『ばら色こざる』『ばら色こざる』と呼んでいたのです。

ほんとうのところ、ピピは、にいさんざるとも、近所のさるとも、まるつきりちがっていました。先がと
がって、いかにも知恵がありそうな鼻。ほんのちよつとだててじつとしていないほど、くるくるよく動く、
はしこい目。口は口で、いつも笑っているようですし、からだつきも、とうしん草のくきみたいに、細く、し

なやかなのです。

まあ、いってみれば、よくいわれるように、ピピは、ふけば飛ぶようなこざるだったのです。

こんなピピを、はじめて見た人は、おや、ちょうど八つか九つの人間の子どもと同じだと、思うかもしれません。ピピは、ほんとうに、人間の子どもと同じように、おしゃべりが好きで、おもちゃで遊ぶのが好きで……。人間の子どもたちと同じように、ちょうちようを追っかけ、小鳥の巣をさがしに行き、人間の子どもと同じように、まだよくうれない、かきやいちじくをむしゃむしゃ食べました。そして、おなかいっぱい食べたあとは、手で口をふくのも、人間の子どもそっくりです。とりわけ、あまりきれいすぎでない子どもとね。

でも、ピピがいちばんやりたがったことは、なんだと思いますか。それはね、人間のやることは、なんでもかんでもさるまねすることだったのです。

ある日、ほかのさるたちといっしょに、森へ行って、せみやこおろぎを追っかけていると、ひとりの若者が木の根つかぶにこしをおろして、ぶかぶかパイプをふかしているのが見えました。それを見て、ピピはいいました。

「あんなパイプ、ぼくもほしいな。ぼくも、口から、あんなけむりをふき出したいな。ぼくが、いろいろみたいにけむりを上げて、家へ帰ったら……。にいさんたち四ひきとも、きつと、そりゃうらやましそうな目で、ぼくを見るぞ。」

こざるが、気まぐれに、頭の中でこんなすてきなことを考えていると、ちょうどそのとき、若者が、つか

れと、昼間の暑さのためにねむくなったのか、大きく一つあくびをしました。それから、草の上にパイプを置くと、ほんとうに、すやすやねむってしまいました。

いたずらこざるのピビは、それを見て、どうしたと思いますか。

ピビは、ぬき足さし足で、そうっと、ねむっている若者の方へ近づいていきました。そして、息をひそめると、片足をのぼして、信じられないほどのすばやさで、草の上に置いてあるパイプをつかみました。それから、すたこらさっさと、風のようににげってしまいました。

家に着くとすぐ、ピビは、おとうさんとおかあさん、それににいさんざるたちを呼びました。そして、みんなの見ている前で、口に大きなパイプをくわえ、年とった船員みたいにうまい手つきで、ゆうぜんとパイプをふかしはじめました。

おかあさんざるとにいさんざるたちは、ピビの口から、けむりが出るのを見て、けらけら笑いころげました。でも、おとうさんざるは、考え深く、これまでたくさんのかんがえをしてきて、いろいろなことを



知っていましたので、ピピに向かつて、やさしく教えたとすような口ぶりでいいました。

「いいか、ピピ。そんなに人間のさるまねばかりしている、そのうちに、おまえが人間になって……。もしたらどうなるって？　そしたら、あんなさるまねなんか、しなきゃよかったと、ひどくこうかいするさ。だが、もうおそいかな。」

そのことばを聞いて、すっかり心配になったピピは、あわててパイプを投げ捨て、たばこをすうのはやめました。でも、パイプをぬすむなどという悪さをするようなさるが、ろくなことになるわけがありません。じっさい、それから何日かたったあと、ピピは、また、ひどいいたずらをやらかして、とても美しいしっぽをなくしてしまったのです。それは、一度見たら忘れることができないほど、それは美しいしっぽだったのですが。

そんな美しいしっぽを、ピピがどうしてなくしたかって？　それは、思い出しただけでもなみだが出てくるような、むごい、悲しい物語です。こんどは、その話をいたしましょう。

2

「ピピは、どうして、あんなに美しいしっぽをなくしたか。」

ところで、ピピの一家が住んでいた森を一步か二歩出たところに、大きなぬまがあって、そこに、二千才ばかりの年とったわにが住んでいたというのを、みなさんに知っておいていただかねばなりません。

この年よりわにはアラバ・バッバという名まえでしたが、年のせいで、すっかり目が見えなくなっていま

した。これでは、もう、自分^{じぶん}で働^{はたら}いて、パンのひとつもかせぐことはできません。

そこで、アラバ・バツバは、しかたなく、朝から晩^{ばん}まで、ぬまの岸^{きし}のすぐ近くで、水から頭^{あたま}を出し、いつも口を大きくあけていました。こうしていれば、そこを通^{とほ}りかかるものがみんな、人間^{にんげん}でも動物^{どうぶつ}でも、かわいそうに思^{おも}って、口の中へ、何か食^たべられるものを入れてくれるだろうと思^{おも}ったからです。うえ死^じにしないで、あと千年も生きられたらいいのですから。

また、ほんとうに、通^{とほ}りがかりの者^{もの}はだれでも、人間^{にんげん}でも動物^{どうぶつ}でも、かならず、このかわいそうな年よりのわにのために、ちよつとした食^たべものをめぐんでやりました。

ビビも、よく、わにの口へいろいろなものを入れてやりました。でも、このいたずらこざるは、たびたび、わざと口の中へ入れるものをまちがえて、喜^{よろこ}んでいました。くだものやさかなのかわりに、口いっぱい小石を投^なげこんだり、また、木のえだやいら草をたばねたもの、そうかと思^{おも}うと、たまたま道^{みち}ばたに落^おちていた、さびたくぎやかぎばりを入れることもありました。

年とったわには、こんなひどいいたずらをされても、おこりませんでした。ほんとうにおこらなかつたんですよ。アラバ・バツバは、小石でも、木のえだでも、いら草でも、くぎでも、静^{しず}かにはき出して、「いいかい。いたずらこざる。そのうちに、いままでのことをすっかり、だれかに仕返^{しかえ}しされるぞ。」とでもいうように、軽^{かる}く頭^{あたま}をふるだけでした。

こんなふうに、どんないたずらしても、わにが、おこりもしなければ、べつによそよそしくもしないの
で、ビビは、だんだんいらいらして、ある日、むじゃきそうな、なにくわぬ口ぶりで、わににたずねました。